

令和 8 年度 第 1 回総合教育会議 議事録

日時 令和 8 年 7 月 14 日（火）午後 2 時～

場所 文化センター 大会議室

第1回総合教育会議 議事録

1 日 時 令和8年7月14日（火） 午後2時～午後5時

2 場 所 いわき市文化センター 大会議室

3 出席者	いわき市長	内田 広之
	いわき市教育長	平澤 洋介
	いわき市教育委員会 教育長職務代理者	小峰 美保子
	いわき市教育委員会 教育委員	阿部 武彦
	いわき市教育委員会 教育委員	小林 利明
	いわき市教育委員会 教育委員	緑川 琴江
	福島県高等学校長協会いわき支部長	箱崎 兼一
	福島県立いわき総合高等学校 校長	南郷 市兵
	福島県立いわき支援学校 校長	江田 貴洋
	いわき市小学校長会 会長	和田 裕二
	いわき市小学校長会 副会長	坂本 義仁
	いわき市小学校長会 事務局長	梅原 広
	いわき市中学校長会 会長	宮内 憲司
	いわき市中学校長会 事務局長	平山 明裕

4 内 容

（1）協議事項

子どもの学びのつまずきを理解し、支援するための方策について

※ゲストスピーカー

一般社団法人今井むつみ教育研究所 所長

慶應義塾大学 名誉教授 今井 むつみ氏

（2）報告事項

いわき市小中学校業務改善方針について（業務量管理・健康確保措置実施計画）

【会議内容】

1 開会

2 議事

会議設置要綱第4条の規定により、市長が議長となること、また、同要綱第7条第2項の規定による第1回会議の議事録への署名は、小林委員及び緑川委員が行うことを確認した。

(1) 協議事項 子どものつまづきを理解し、支援するための方策について

①事務局説明

いわき市の学力向上の取組について（学校教育課 津田課長）

いわき市教育委員会の令和8年度における学力向上に向けた取組について、本市の目標や方針、主な取組のポイントを絞って説明する。

こちらは、本市の学力向上における各種施策をまとめた概要図である。

今年度より、これらを「学力向上強化推進事業」として様々な取組を一体的に進めている。

はじめに、本市の学力向上の目標についてである。

本市では『次代のいわきを担う「生きる力」を身に付けた子どもの育成』を掲げ、様々な施策を推進している。特に学力向上においては、「認知能力」とともに「非認知能力」を重視し、確かな学力を目指すという方針を掲げている。これを、未来を拓く「いわきの学び」の推進として取り組んでいる。

次に、具体的な取組を2つ紹介する。

1つ目は、学校カルテ（学校・学級ダッシュボード）、通称「ダッシュボード」と呼ばれているが、このシステムを活用した、エビデンスに基づく学力向上策である。

本市は、93の小・中学校を所管しており、学校数が多いだけでなく、規模や地域の特徴も様々であるため、市全体の平均を基にした一律の取組では、各学校の実態にマッチしにくいという課題があった。そこで、それぞれの学校が自校の実態に応じた対策を講じられるよう、このダッシュボードシステムを構築した。

このシステムでは、全国学力・学習状況調査などの各種調査の結果から、教科の学力だけでなく、非認知能力や学習方略などをクロス分析し、グラフや図表で視覚化している。これにより、自校の強みや課題を多角的・複合的に把握できるようになった。

各学校がこのデータをもとに対話を活性化させ、学校運営・学級づくり・授業づくりに生かしていく取組を推進している。

2つ目は、中学校区における小中連携を活かした取組の推進である。

本市の課題の一つに、小学校から中学校への接続期において、学習意欲の低下などがみられる、いわゆる「中一ギャップ」がある。そこで今年度より、すべての中学校区において、小・中学校が連携した授業研究会を実施している。

小・中学校が互いの授業を見合い、対話する機会を通して、小学校の教員は「義務教育の学びの出口」を知り、中学校の教員は「学びの土台」を知ることができる。これにより、学習指導や生徒指導における共通理解が図られ、各校

の学力向上策をより効果的に推進することが期待できる。子どもたちの「9年間のシームレスな学びの環境」をつくっていくことが、この取組のねらいである。

最後に、今年度からスタートする新たな取組を紹介する。

1つ目は、「いわきの学び推進月間」の設定である。

これまで説明した取組を特に推進する期間を11月に設定し、期間中は、PTAと連携した広報活動や、ダッシュボードを活用した研修などを実施し、いわきの学びを市全体で一体的に進めていく。

2つ目は、子どもの主体的な学びを促進する環境づくりについてである。

先が見通せない現代社会を生き抜く力の育成を図るためには、「総合的な学習の時間」を中核とした探究的な学びの充実が極めて重要となる。そこで、教科の枠を超え、子どもたちの知的好奇心を大切にしたい深い学びを推進するため、「探究活動成果発表コンテスト」を企画した。

「総合的な学習の時間」での取組も含めて、子どもたちの日頃の探究的な学びの成果を発表する機会として、市内の公立中学生を対象としたコンテストを、こちらも11月に開催する。本コンテストの上位者は、高校生が集う探究活動のコンテストにおいても発表を行う予定であり、中学生の問題解決能力や思考力、判断力、表現力等の育成につながるものと期待している。詳細はホームページからご覧いただくことができる。

最後に、「英語力向上事業」である。

この事業では、子どもたちの語学力の向上を図るための様々な取組を実施する。英語4技能を測定する英検IBAのデータやAIアプリを活用した授業改善をはじめ、ハワイや台湾など海外との交流を通じた授業実践の研究を進めていく。

さらに、子どもたちが主体的に英語を使う機会として、新規ALTにいわきを紹介するバスツアーや英語のパフォーマンスコンテストなどを企画している。

このほかにも多岐にわたる施策はあるが、変化の激しいこれからの時代だからこそ、未来のいわきを、そして社会を力強く担う子どもたちの育成に向け、これらの取組を効果的に推進していく。

②ゲストスピーカー講演

生きた知識を生む記号接地とプレイフルラーニング

(一般社団法人今井むつみ教育研究所 所長 今井 むつみ氏)

長年、認知科学の基礎研究として、主に乳幼児がどのように言語を獲得し知識を構築していくのか、そのメカニズムの解明に取り組んできた。子どもが自ら思

考し、周囲の環境や体験を通して言葉や概念を学んでいくプロセスこそ、人間としての最も自然な学びの姿であると考えている。

そうした研究を行っていたところ、私の著書を読んだ広島県教育委員会の教育長から連絡を受け、広島県にお招きいただく機会を得た。それまでは教育委員会や学校教育の現場で直接発言する機会は少なかったが、教育長が私の著書にある知見を「教育への普遍的な視点である」と受け止めてくださったことがきっかけとなった。

当時、広島県では、子どもの学力不振という深刻な課題に直面していたが、学習面での困難さに見えるものの、「なぜこれほどまでにつまずくのか」という根本的な原因が分析できずにいた。そこで、現場の教員や教育委員会と連携し、子どもの学習におけるつまずきの本質を明らかにするプロジェクトを始動させ、その成果として「たつじんテスト」の開発へと至った。

長年にわたる調査を通して浮き彫りになったのは、多くの子どもたちが「計算の手続きや処理はできるが、その意味を理解していない」という実態である。

例えば、小学校低学年の簡単な算数の文章題において、足し算、引き算、掛け算といった計算自体は問題なく処理できるにもかかわらず、文脈に応じてどの四則計算を適用すべきかが判断できない子どもが少なくない。

その結果、問題の状況とはかけ離れた計算式を立て、元の数値よりも明らかに不自然な解が導き出されても、それに疑問を感じないという現象が起きる。

また、時間の単位換算においても、「1時間は60分である」という事実自体は知っていても、文章題を解く際には「5時間10分」を「510分」と誤認してしまうなど、保有している知識を問題解決の文脈で正しく機能させることができていない。

この傾向は全国学力調査のデータからも読み取れる。例えば小学6年生を対象とした数直線の問題で、0から1の間を3等分した位置（3分の1）や1を超える位置（1と3分の2）を捉えさせる問題の正答率は約3割にとどまる。

しかし、直後の小問である「2分の1 + 3分の1」という単純な計算問題になると、正答率は8割を超える。

さらに中学生になっても、「a mLの40%」といった割合や文字式の意味を正しく理解できていない生徒が相当数存在する。

これらは単なる演習不足ではなく、数や記号の意味、あるいは概念の本質的な理解が欠落していることを示している。

従来の教育行政や調査報告では、どの問題でどの誤答を選択したかという数値データは提示されるものの、なぜ子どもがその誤答に至ったのかという根本的な認知プロセスの解明には至っていない。

その根本原因を分析せぬまま「間違えないように指導する」という対応に終始すれば、教員は正しい解法を教えて丸暗記させるしかなく、結果として実際の場面で全く機能しない「死んだ知識」を生み出す悪循環に陥ってしまう。

認知科学において、知識は大きく「生きた知識」と「死んだ知識」に整理される。

「死んだ知識」とは、教わった事実がそのまま記憶の引き出しに格納されている状態である。知識としては存在するものの、いつどの引き出しを開けて活用すればよいのかが判断できないため、問題解決の道具として機能しない。

一方、「生きた知識」とは、新しい学習内容を獲得した際、単に記憶が追加されるだけでなく、既存の知識体系全体と相互に関連付けられ、知識のシステム全体が再編成された状態を指す。

学びとは、新たな断片的な情報を既存の知識と結びつけ、システム全体を再構築していく動的なプロセスであり、認知科学ではこの自力で全体を引き上げていく過程を「ブートストラッピング」と呼ぶ。

知識を表面に貼り付けていくだけの暗記型学習は、提示された条件下でしか機能しない応用力のない知識となり、いずれAIなどのテクノロジーに代替される。

これからの時代に求められるのは、断片的な知識要素を自らの頭で組み替え、離れた領域の課題にも応用できる、柔軟で構築的な知識システムである。

こうした認知科学の知見に基づき、学力を支える基盤として次の3つの柱を設定した。

1つ目に「言葉の運用力」である。これは単に知っている語彙の多さではなく、多様な文脈で言葉を多角的に使いこなす力を指す。

2つ目に「数や量の直感的理解」である。計算手続きの手順を知っていること以上に、日常的な実習や体験と結びついた実感のある数量感覚が重要となる。

3つ目に「学力の基盤となる思考力」である。ここで言う思考力とは、いわゆる知能テストで測定されるような知識を排除した純粋な空間・記号操作能力ではない。既存の知識体系に新しい学習内容を関連付け、誤解をほぐしながら新たな理解を統合していく力である。

これらの力を測定し、個々のつまずきを特定するために開発されたのが「たっじんテスト」である。

テストの分析からは、子どものつまずきに多角的な要素が絡み合っていることが分かった。

日常生活における言葉の意味規定と、学校数学で求められる概念規定とのギャップ、さらには必要な情報にのみ注意を向け不必要な情報を遮断する「実行機能」や、文脈に応じて視点を切り替える「視点変換能力」の未発達が、学力の大きな壁となっている。

実際、たつじんテストにおける数量の直感的な把握能力や類推に関するテストの得点は、特に中学数学など全国学力調査の成績と非常に高い相関を示す。

つまり、教科内容の表面的な暗記ではなく、その背景にある直感的なスキーマや認知的なコントロール能力が、学力全般を強力に予測するのである。

人間が意味を解釈し、知識を機能させる上で不可欠なのが「記号接地」というプロセスである。

AIは膨大なテキストデータから「イチゴ」に関する統計的知識を出力できるが、イチゴの実感を伴う味や香りを体験していないため、その記号は世界に接地していない。

一方、人間は実生活での具体的体験を通して経験を抽象化し、意味を構築していく。

知識は、他人の頭から直接移植できるものではないため、教員がどれほど親切に教えても、子ども自身が自らの認知システム内で関係付けを行わない限り「生きた知識」にはならない。

教育者に求められる役割は、力づくで知識を引き上げるのではなく、子どもが自ら意味を発見できるよう適切な「足場かけ」を提供することである。

そのための具体的アプローチとして提示しているのが「プレイフルラーニング」である。

単なるドリル演習のように同一形式の問題を反復させるのではなく、多様な状況や角度から対象に触れる「多様学習」を取り入れることで、知識は身体化され、本質的な理解へと高まる。

実際に開発した「単位トランプ」や「分数トランプ」といったリアルなカードゲームの実践では、視覚的なヒントを参考に仲間と対話し合いながらゲームを進める中で、子どもたちが自発的に「単位的重要性」や「同等な分数の関係」を発見する姿が見られた。

時間の単位換算をまだ学校で習っていない小学2年生であっても、遊びを通じて自発的に概念を捉え、短期間で高い正答率を獲得し、さらにその理解は長期間保持された。

教員が一方的に「教え込む」指導から脱却し、子どもが自ら問い、意味を発見できる環境へと学習の主導権を委ねたとき、子どもは自走し始め、教科の枠を超えた真の「生きた知識」を獲得していくのである。

(2) ディスカッション

【内田市長】

まず、教育委員、教育長から意見、感想、また、疑問点などあれば、お聞きしたいと思う。また、本日は、学校現場サイドの現状や意見をお聞きするため、小中学校、高校、特別支援学校の校長先生にお越しいただいている。

また、時間があつた場合には、傍聴者の皆様からも質問、意見を伺う時間を設けたいと思う。

今井先生、大変貴重なご講演をいただき、心より感謝申し上げたい。

思考のプロセスや「間違えるプロセス」が非常にクリアに可視化されていた。それ以上に、思考力や言語がどのように定着し、形作られていくのかという点について、認知科学の視点から明確に示され、大変勉強になった。

通常認知科学の本を読むだけでは抽象的で難解に感じられる部分を、噛み砕いて分かりやすく解説していただいたおかげで、内容がスムーズに理解できた。いわき市内のすべての教員はもちろん、小中学校だけでなく幼児教育や保育の現場に携わる方々にも広く共有したい内容である。

また、日々の授業において、生徒の発見や学びを生み出す仕掛けづくりがいかに大切かを実感した。容易なことではないが、そうしたプロセスの組み立てこそが重要であると改めて学ばせていただき、まさに目から鱗が落ちる思いであつた。

【阿部委員】

今井先生の講演に、「足場かけ」という言葉があつた。私は現役の高校教員だが、まさしく今、目の前の生徒たちに対して自分に求められているのが、この「足場かけ」だと痛感している。

生徒たちとは約50年の世代差がある。その言葉や価値観のズレを毎日少しずつ手繰り寄せ、ほぐしていく中で、子どもたちが何かを理解し、ふっと成長の階段を登る瞬間がある。それこそが教員としての大きな醍醐味なのだが、このプロセスこそが、先生のおっしゃる「記号接地」の話と強く結びつき、非常に腑に落ちた次第だ。

例えば「米が美味しい」という言葉一つにしても、我々は幼少期から田植え、草取り、天日干し、粃すりといったプロセスを経て、秋に炊かれたお米の味を知っている。これは間違いなく「身体感覚を伴った記号接地」を果たしている体験だ。

一方、トマトが嫌いな子どもたちは、熟した本来のトマトの味を知らないまま言葉を使っているのかもしれない。

このように、記号接地をしている我々と、まだしていない子どもたちとの「言葉の差」を手繰り寄せていく作業こそが、学力の根本にあるのではないかと感じている。

また、今後 AI 時代が本格化する中で、AI が VR 空間などを通して人間に擬似的な記号接地を体験させようとする未来も容易に想像できる。しかし、そこにはやはり決定的な崖が存在するはずだ。それを超えて人間が身体的に実感し、学びをものにしていく場を創ることが、これからの教育や人間に求められる役割であり、AI 時代における学びの本質ではないかと考えた次第である。

【小峰委員】

私も先生の書籍を拝読した一人である。私自身、かつて小学校の教員を務めており、専門が算数であったことから、非常に興味深くお話を伺った。

講演の中でまず印象的であったのは、書籍にもあった「現代社会において『学力とは何か』と問われると、多くの人が学校の成績と答える」という点であり、教員を含め、大人はまさにそのような認識になりがちである。

しかし、先生の「知識は単に覚えるものではなく、学びながら創り上げていくものだ」というお言葉をお聞きし、まさにその通りだと深く納得した。

そのうえで、学校教育において何を変えていくべきか、いくつか大きなヒントを得ることができた。生活概念と教科を結びつけること、そして「実践・失敗・修正」をらせん状に経験させていくことが極めて重要であると感じた。

かつて小学校に総合学習が導入された際、私自身も指導に深く悩んだ経験がある。生活概念や地域、他教科との関連性を重視しつつも、学び手にすべてを委ねることができず、結果として教員が主導してしまう場面が多かった。そのため、探究学習へと十分に深めきれなかったのではないかと振り返っている。

今後の学習指導要領改訂においても、探究学習の重要性が強く叫ばれており、従来の総合学習を探究学習へと進化させるうえで、教員がいかに適切な「足場かけ」を構築すべきか、現場はまさに頭を悩ませているところである。この点について、何か示唆となるヒントをいただければ幸いである。

今井氏

私自身、元より教育の専門家ではなく、幼い子どもたちを対象に実践してきたに過ぎない。そのため、こうした場でお話しするといつも難解な質問を受けるが、やはり「さじ加減」が非常に重要であり、それは子どもの年齢によっても大きく異なると考える。

探究学習は、中学生や高校生であればイメージがしやすい。小学生であっても高学年なら、「社会と算数をつなぐ」といった形での展開が理解できる。しかし、例えば小学3年生に対し、高学年と同じような探究学習を行おうとすると、内容が曖昧になり「何をやっているのかわからない」状態に陥りがちである。

このため、「探究学習」という言葉を真正面から受け止めすぎない姿勢が大切であり、「この単元をどのように生活と結びつけられるか」と考え、できることから少しずつ取り組むのが望ましい。最初からすべての要素を詰め込もうとすれば、教員も負担が大きく、子どもたちも混乱してしまう。

ドリルのような反復学習も重要ではあるが、多様な文脈で知識を活用し、習った知識を自ら使ってみる「多様学習」こそが重要である。活用する練習は遊びや家庭でも可能だが、まずは「こうやって使うのだ」という基本を学校で提示することが求められる。

ある学校の事例だが、学習につまずきが見られ、小学5年生で分数が理解できず、特別支援学級への移行も検討されるほど厳しい状況のお子さんがいた。しかし、カードゲームを取り入れたところ、給食の時間に食事を分けながら「これが2分の1だよ」「これをさらに半分にしたら4分の1だよ」と自ら口にするようになったという。知識が記号としてだけでなく、実感と結びつく「記号接地」に向かっているエピソードであり、非常に感慨深い。

子どもたちが算数を苦手とする大きな要因は、日常生活との結びつきが見えにくい点にある。だからこそ、「探究学習だから高度なことをしなければならない」と気負う必要はない。子どもたちが苦手とする概念を日常生活の場面でどう使えるか、試してみるような取り組みでも十分価値がある。

【小林委員】

私も事前にご著書を拝読した上で今回の会議に臨んだが、実際に直接お聞きすることでより一層理解が深まり、大変有意義な時間となった。

「言葉のたつじん」「考えるたつじん」というお考えは、子どもの学習における質問やつまずきがどこにあるのかという大きな観点から始まっていると感じる。また、「スキーマ」という概念も、今後の教育において極めて重要な視点の一つであると実感した。

学力とは、単に基礎知識と認知能力を足し合わせただけのものではなく、大人にとっての「当たり前」が、子どもにとってはどれほど抽象的で難解なものであるかを改めて実感したとともに、この気づきこそが子どもたちを導く上で欠かせない視点であると考えます。

指導者側もこれまでの固定観念を捨て、いかに子どもの目線に寄り添えるかが問われていると感じた。

最後に一点、質問させていただきたい。先ほどカードゲームを用いた取り組みの紹介があったが、今後、タブレット等を活用したICT化を取り入れていく考えはありだろうか。

今井氏

プログラミングが得意な学生と「たつじんテスト」やカードゲームのICT版を試作したが、結論は「紙の方が良い」であった。もちろんICTを全否定するわけではない。

ICTであれば遠隔プレイも可能だが、教室で対面で取り組む子どもたちの表情は格別だ。モニター校では、相手を出し抜くどころか手札を公開し、4人で「次は何を出すか」と相談し合う姿が見られた。リアルな場で協力し合う点にこそ価値がある。

ICT版「たつじんテスト」は画面のスクロールが必要で、紙のように一瞬で全貌を把握できないため教員が結果の平均点ばかり見てしまいがちだ。

私たちが重視するのは、個々の解答に現れる「認知の癖」である。矢印で結ぶ問題など、紙なら一目でわかるつまずきを ICT では見落とされてしまうために中止した。

もともと、文字読みが苦手な子や教員が個別フォローできる環境ではタブレットが有効であり、個別仕様の余地はある。だが全般としては紙に優位性がある。

なおカードゲームは、特別支援学級の児童も一緒に朝や放課後の15分程度、週1～2回で行うのが望ましい。この場では特別支援学級の子にも役割が見つけ、周囲も自然とサポートする。

授業に退屈して普段は他児に手を上げてしまうギフテッドの小学5年生がいたが、このゲームでは一切手を上げず、特別支援学級の子へさりげなくヒントを出しており、この変化には校長先生も深く感動されていた。

【緑川委員】

保護者という立場で教育委員を務める私の娘も不得意教科があり、自学や先生方の手厚いご指導のおかげで「授業が分かった」と帰宅するものの、テストの結果には結びついていない現状がある。

今井先生の著書を拝見し、学校での学びが家庭での学びと十分に結びつかず、定着していないことが、先生方の指導の妨げになっているのではないかと懸念している。

家庭で日常的に実践できることや、学校の学びに寄与できる働きかけについて、ご助言をいただければ幸いである。

今井氏

例えば、調理は親子にとって素晴らしい学びの機会である。親が食事を作る際、子どもに「あっちに行っていて」と勉強を促す光景は多いが、子どもにとって親の手伝いは大きな学びである。

現在、問題なのは親の手が離せない間に子どもがショート動画などを長時間見続けてしまうことだ。制作者側は考えさせないよう巧みに作っており、これに依存すると時間や思考力を失う危険がある。だからこそ、その時間を親子での調理に充ててほしい。

例えば「割合」の概念は難解だが、日常の中で十分に育める。洗濯で「今日はお父さんがいないから洗濯物は4分の3、洗剤も少し減らそう」と考えたり、調理レシピを人数分に計算し直したりすることこそ、実体験と概念を結びつける「記号接地」の好機である。

体験の格差が経済格差として語られがちだが、学力に影響を与えるのは経済力よりも「親が学びの本質を理解しているか」だ。単に「勉強しなさい」と詰問するのではなく、日常でさりげなく学びに誘導することが親の腕の見せ所で

ある。いくらカードゲームを使っても、やり方次第で子どもは「テストされている」と感じてしまう。学びがプレイフルになるかは親の関わり方次第なのだ。

社会全体で子どもを育てる上で、保護者へ「学びの仕組み」を提供することは不可欠である。

フィンランドの幼児教育では、知識を先取りさせるのではなく、身体感覚での経験を小学校以降の学びに結びつける工夫がなされている。親がこの仕組みを知っていれば、家庭でも自然な学びを生み出せるはずだ。

【小学校長会 和田会長】

講演の随所に「なるほど、その通りだな」と深く納得させられる場面があり、拝聴している私まで自然と笑顔になってしまうような、大変ありがたい内容であった。

今井先生のお話を伺いながら、私は20年ほど前に所属していた学校での経験を思い出していた。当時、「家庭科の学習を通して、どんな子どもを育てたいか」を同僚と話し合った際、「学校で学んだ調理実習などの内容を、家庭でも進んで実践できる子どもを育てたい」という意見が出た。私の専門は算数であり、「算数でも同じように、私生活に生きる自主的な学びをつくれないか」と実践したのだが難しかった。だからこそ、「子どもたちが自ら主体的に学びを進めていける教育を作りたい」というようにすごく感じた。

それだけに、先ほど今井先生が紹介されたカードゲームの映像を拝見した際は、子どもたち同士の楽しそうに関わり合う姿が、手にとるように目に浮かんだ。

現在、本校でもタブレットを活用した学習を取り入れているが、タブレットに向かっている間、子どもたちは静かである。

一方、先ほどのカードゲームをやっている姿は、きっと子どもたちが笑顔で、賑やかに、歓声を上げながら楽しんでいる様子が想像できる。そのように得た学びこそが、本当にこれからの時代を生きていく力になるのだと強く実感した。

ぜひ、このカードゲームをここいわき市でも採用していただきたいと思う。

【中学校長会 宮内会長】

私は理科の教員ということもあり、単位や時間といった抽象的な単元の指導において苦労した経験がある。どうすれば抽象的な事象を具体化し、分かりやすく提示できるかという点は常に考えている。

講演の中で、プレイフルラーニングを通じて子どもたちの自立した学びを育み、「概念を体に落とし込み、直感的に頭の中で操作できるようにする」というアプローチを伺い、その重要性を痛感した。こうした根底にある概念が身についていなければ、理科の学習は必ずどこかで行き詰まってしまう。

例えば、理科における比例計算や、メンデルの遺伝の実験で「938 対 300」という結果が出た際、生徒たちはそれが「3 対 1」であるという関係性を直感的に理解できない。最終的には教員側が「おおよそ 3 対 1 である」と結論づけて

しまいがちだが、本日の講演には、そうした概念の壁を乗り越えるためのヒントが数多く散りばめられていた。

大変参考になる事例ばかりで、「もう一度理科の授業を受け持ち、実践してみたい」と感じるほどだった。本日は、今後の教育実践に活きる貴重なご示唆をいただき、心より感謝申し上げる。

【福島県高等学校長協会 箱崎支部長】

今井先生の講演を伺い、小・中・高を通した学びの連続性や、概念が子どもの生活・経験としっかり結びつくことの大切さを改めて実感した。特に、教科の学びそのものが本来「探究的」であるべきであり、探究的な学びが教科を包含していくという視点には非常に感銘を受けた。

その上で、今井先生に一つ質問がある。

先生のおっしゃる「学び」とは、人間ならではの「アブダクションを培うこと」と言い換えてもよいのだろうか。

生成 AI が普及する現代において、人間ならではの直感や推論といった認知の働きを育てることこそが重要だと感じている。物事を極めた「達人」と呼ばれる人々は、まさにこの優れた直感やアブダクションの力を働かせていると思うのだが、先生が目指される「学び」のゴールも、このアブダクションの力を引き出すことにあるのか、今井先生の考えをぜひ伺いたい。

【福島県立いわき支援学校 江田校長】

今井先生の講演の冒頭にあった「人間の学びの自然な姿」という言葉が、非常に心に残った。これは「知的障がいのある児童・生徒の学力とは何か」、そして「最適な指導方法とは何か」という、私たち特別支援学校の永遠のテーマそのものだからである。

特別支援学校には「生活単元学習」をはじめとする、各教科を合わせた指導形態がある。現場の教員は、子供たちの発達や認知を見極めながら授業を作っているが、時代によって「教科学習の重視」と「生活の重視」の間で、常に議論が揺れ動いているのが現状だ。

しかし本来は、机の上で「あいうえお」や数字を覚えるだけでなく、教室から飛び出して、友達や地域と関わりながら力を発揮していくことこそが基本である。

実は今日、小学部2年生のクラスで、自分たちが栽培したプチトマトを使ってピザを作る授業があった。校長室にも届けてくれたのだが、これは単なる調理ではなく、まさに先生がおっしゃった「数や量の概念」の学習であった。「トマトを半分にしたら2つになるね」「クラス4人と先生2人で、ピザは何個いる？」といったことを、生活の流れの中で体験しながら、生きた知識として学んでいたのである。

こうした「生きた知識」「生きる学び」をこれからも追求し続けなければならないと、先生のお話から改めて教えていただいたことに心より感謝したい。

【福島県立いわき総合高等学校 南郷校長】

2月まで義務教育学校および認定こども園の校長・園長を務めていた。また、前任校には、特別支援学級があり、0歳児から年長児までが在籍していたため、示された発達の姿や特性のある子どもの育ちは、日々の実践と強く重なるものであった。現場の実感を理論づけていただいたように感じた。

思考する力や生活経験に基づく概念という器、そして実社会の文脈というコンテンツは切り離せないと思うため、幼児期からの生活経験がいかに重要であるかを再認識した。

それは、学校において、「総合的な学習の時間」が本来目指していた姿でもあり、生活と切り離されていた教科の知識を、しっかり子どもたちの生活と結び直すことが本質であったというように感じている。

また、幼児期からの連携の重要性を感じる一方で、講演のなかで説明のあったカードゲームは、いわば子どもたちの生活経験の薄さや思考力の弱さを学校現場で補おうとしているというように感じた。この点について、今井先生のお考えをお伺いしたい。

今井氏

皆さん、大変貴重で多様な声を届けていただき、心から感謝している。

さまざまな観点があるため短い時間でまとめるのは難しいが、確かに私は「アブダクション」を重視している。生成AIと人間を分かつものこそが、アブダクションであると考えているからだ。

人間は、ごくわずかなピースしか手元になくても、自分の知識を使って、真っ白な空間を埋めて絵を描いてしまう。それこそが人間のすごさである。

しかし、アブダクションは間違いを犯すことも少なくない。思い込みによる犯罪にもアブダクションが関わっているように、幼い子どもでも行うこの推論は、単に「すること」自体が重要なのではない。「質の高いアブダクション」ができる人間になること、それが大切なのである。

そのためには、経験に根ざした「良いスキーマ」を育てなければならない。

ある分野の熟達者は、常に「どうすればより良くできるか」を考え続けているため、普通の人とは精度が全く違う、豊かでの確な直感を持っている。この良いスキーマを持ち、質の高いアブダクションができることこそが、「生きた学ぶ力」なのだと思う。

もちろん、あらゆる分野で達人になるのは不可能だ。

熟達者であっても、自分の専門分野で卓越しているだけで、決してオールマイティではない。子どもたちには、自分がどの分野で達人になれるのかを見つけてほしいと願っている。

本日お話しする時間が足りなかったのだが、補足資料の中に「記号接地と効率性追求は向かう方向が逆である」というグラフがある。

知識の習得プロセスについて、多くの方は「勉強すればするだけ直線的に知識が増えていく」という、一次関数的なイメージを持たれているかもしれない。

しかし、認知科学における知識観において、この一次関数モデルはほぼ存在しない。どんな分野でも、典型的には「指数関数モデル」の曲線を描く。

この指数関数グラフの特徴は、最初に長い「停滞期」があることだ。そして、この停滞期は決して悪いことではなく、非常に重要な意味を持っている。

例えば、子どもの言語習得がまさにこの形である。子どもはこの停滞期に、大人の言葉を一生懸命に分析し、自分なりの仮説を立てようとしている。

その仮説が間違っていることも多いため、大人の言葉をそのままオウム返ししていた初期の頃よりも、この時期には一時的に間違いが増え、発達が落ち込んだように見えることがある。

しかし、これも必要なプロセスだ。自分で分析し、仮説を立て、間違いを修正していくことで、初めて「ここに注目すればいいのだ」というコツを掴めるようになる。そこを抜けると、言葉は爆発的に増えていく。

先生方や保護者の方には、学びとはそういうものだという認識を持っていただきたい。子どもの成長が停滞していると、「やり方が悪いのではないか」「理解していないのではないか」と不安になりがちだが、そうではない。停滞期こそ、子どもは自分なりに一生懸命考えているのである。

一方で、直線的な「一次関数モデル」を想定してしまうのは、人間の認知バイアスのようなものだ。「早く始めて教え込めば教え込むほど、直線的に知識やスキルが身に付く」という考え方には、学び手の主体的な分析や主体性が抜け落ちている。

特別支援を必要とするお子さんも含め、基本的にはどのお子さんもこの指数関数モデルに則って成長する。違いがあるとすると、それは「停滞期にどれだけの時間が必要か」という点だ。だからこそ、私たちはその停滞期をじっと見守る必要がある。

同時に、自分で登っていけるように下支えをする「足場かけ」が非常に重要になる。特別支援が必要なお子さんの場合は、個々の特性に応じた、より工夫された足場かけと時間が必要になるが、この指数関数的な発達曲線自体は誰にでも、どの分野にも存在する。

これは学校の勉強に限らず、文学、伝統芸能、古典芸能、そしてスポーツなど、あらゆる「技の習得」に共通することだ。最初から直線的に伸び続けて世

界の一流選手になった人などいない。誰もが必ず停滞期を経験する。その「停滞期」にこそ深い意味があるということを、ぜひご理解いただきたい。

【平澤教育長】

数年前に今井先生の著書「学力喪失」に出会って以来、いつかお話を伺いたいと願っていたが、ようやく本日それを実現することができた。

私は、今年の3月まで高校の教員を務めていた。教育とは未来を創る営みであり、学校は「未来の大人」を育てる場である。しかし、いま重要なのは、その未来の大人たちに「自らの人生を切り拓く力」が本当に身についているかという点だ。暗記主体の知識は学力の一部に過ぎず、それだけで未来を勝ち取ることは絶対にできないため、どのようにしてその力を育むべきなのかという点に、非常に大きな課題があると考えている。

小中学校などの発達段階におけるつまずきが、高校段階の学力にまで引きずられているケースは少なくない。少子化が進む現代において、子どもたちは未来の大人として、自ら人生を切り拓く力を社会から求められ、また自らも求めるようになる。

つまずきの原因について、先生がおっしゃったように、経験則から「どこが悪いか」「ここが弱点だ」と指摘することはできる。しかし、「ではどうすればいいのか」という具体的な解決策は、意外にも難しく、これまで語られてこなかった部分でもある。ここをどう克服していくかが、これからの教育のあり方に大きく関わっていると感じていた。だからこそ本日は、まさに「死んだ知識をどう活かすか」「概念をどう捉えるか」という点に強く共感した。一人ひとりの子どもが自らの五感を使って概念を理解しなければ、他人の説明を受け入れるだけでは本当の理解には至らない。そこをどう導くかが極めて重要である。

先生のお話を聞き、これは自転車の乗り方に似ていると感じた。ペダルを漕ぐことだけに集中してしまうと、バランスを取ることができない。しかし、一度ペダルを外し、バランスを取る練習から始めると、後からペダルをつけたときに驚くほど簡単に乗れるようになる。こうした「記号接地」のアプローチが、様々な学習の場面で生きてくるのだと実感した。

今後、私たちが目指すべき「学力向上」とは、決してテストの点数という物差しだけで測れるものではなく、より大きな、トータルな視点で捉えていく必要がある。

本日得た知見を活かし、小・中・高・特別支援学校が一体となった、今後の本市の教育のあり方を考えていきたい。

【内田市長】

私自身、文部科学省にて前回の学習指導要領改訂や中央教育審議会の議論に関わった経験がある。当時は「主体的・対話的で深い学び」をはじめ、知識を活用する力をいかに育むかという概念の提示に比重が置かれていた。

本日、今井先生の講演を拝聴し、その概念を実践に落とし込む際のつまずきの要因や、メタ認知の視点から捉えた習得へのプロセスまで緻密に分析されていることに、深い感銘を受けるとともに、これこそが次期学習指導要領のさらなるアップデートに繋がっていくと実感した。

私たち現場に近い立場としては、本日得られた知見を一人ひとりの教員までしっかりと浸透させられるよう、教育委員会と連携しながら尽力していく考えである。

今後とも、ぜひ変わらぬご指導を賜りたい。重ねて、本日のご講演に心より感謝の意を表する。

（３）報告事項 いわき市小中学校業務改善方針について（業務量管理・健康確保措置実施計画）

いわき市公立小中学校教職員における「働き方改革」について
（学校教育課 津田課長）

昨年６月に成立した改正給特法（公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法）において、各教育委員会に対し「業務量管理・健康確保措置実施計画」の策定、およびその実施状況を総合教育会議へ報告・公表することが義務付けられた。

この法改正を踏まえ、これまでの経過および本市公立小中学校教職員における働き方改革の取り組みについて説明する。

平成３０年２月、福島県教育委員会が「教職員多忙化解消アクションプラン」を策定した。これを受け、本市においても同年６月に「第１回いわき市教職員の多忙化解消に向けた検討委員会」を設置・開催し、本格的な議論を開始した。

その後、令和元年の国・県の動向を踏まえ、本市においても、教職員の過度な負担の軽減と、心身ともに健康に働ける環境を整えることで、子どもたちとじっくり向き合う時間を確保し、教職員の質を高めることを目的とし、令和２年４月に「いわき市小中学校業務改善方針」を策定した。教育委員会と各学校が共通認識のもと、教職員の働き方改革に向けた業務改善への取り組みを開始した。

なお、令和2年はコロナ禍の最中であったことから、臨時休業時とその後では、教職員の多忙化に大きな差が生じた。

令和3年には、福島県教育委員会が「教職員多忙化解消アクションプランⅡ」を策定し、「教職員の時間外勤務時間月45時間以内の達成」という目標を明示した。これに合わせ、本市でも、「いわき市公立学校管理規則」を一部改正し、時間外勤務時間の月・年の上限、また、いわゆる繁忙期における時間外勤務時間の月・年の上限及び時間外勤務時間月45時間を超える月数の上限などを規定し、令和3年4月から運用している。

このような取組を進めてきた結果、時間外勤務時間が減少するなど、一定の効果は表れているが、目標である月45時間以内の達成には至っていないのが現状である。

令和6年4月、福島県教育委員会が「教職員多忙化解消アクションプランⅡ」を「教職員働き方改革アクションプラン」へ発展的に改編した。ここでは、多忙化解消の視点に加え、教職員の生活の質と向上、業務のデジタル化を進めるなど、新たな方向性が示された。

さらに、国においても給特法が改正され、教職員調整額、教職調整額を従来の4%から10%へ段階的に引き上げる提言がなされ、本年1月1日からは5%に引き上げられている。

本市においては、県のプラン策定に合わせ、令和7年4月に「いわき市小中学校業務改善方針」を全面改定した。

さらに、令和8年2月に、福島県教育委員会が「教職員働き方改革アクションプラン」を一部改定したことに伴い、本市も、同年4月に「いわき市小中学校業務改善方針」を一部改定した。

これは、「業務量管理、健康確保措置実施計画」を位置づけるようになったことへの対応となっている。

最後に、令和2年度から7年度までの教職員の時間外勤務時間の推移について説明する。

これは、小中学校別における各月の時間外勤務時間について、「45時間以上80時間未満」「80時間以上100時間未満」「100時間以上」の割合を示したものである。

中学校の令和7年度4月を例に挙げると、時間外勤務時間が45時間以上80時間未満の割合は43%となっている。また、80時間以上100時間未満は

5.3%、100 時間以上は 2%となっており、人数に換算すると 15～16 人程度である。

表の黄色の部分は前年度よりも割合が増加した箇所を示しており、桃色の部分は 6 年間の中で最も割合の高かった年度を示している。

中学校の令和 7 年度を見ると、黄色の部分は 4 か所ある。7 月の「100 時間以上」、12 月の「80 時間以上 100 時間未満」、3 月の「45 時間以上 80 時間未満」および「80 時間以上 100 時間未満」が前年度より増加しており、これらは依然として改善が必要な部分である。

一方、小学校の令和 7 年度を見ると、黄色の部分は 8 か所ある。小学校では、時間外勤務時間が「45 時間以上 80 時間未満」の割合が 4 月、6 月、12 月、3 月で増加しており、良い傾向にあると考える。

今後とも、80 時間以上や 100 時間以上の深刻な長時間労働の割合が前年を上回らないよう抑制しつつ、全体の勤務時間を 45 時間未満へと縮小させていくため、各学校と緊密に連携しながら時間外勤務の削減を強力に進めていきたい。

(4) その他

【傍聴者（小野潤三市議）】

大変勉強になったと同時に、内田市長就任以降、総合教育会議は非常に内容が充実しており、今後もこのような形で継続されることを期待している。

特に印象的だったのは、教育委員の方々が事前によく準備をされて臨んでいた点である。私自身は特段の準備をせずに参加したため、本日深まった議論の内容を、これからしっかりと咀嚼したいと考えている。

また、小・中・高・特別支援学校を代表する教員が一堂に会して議論する場は、極めて意義深い。本日は長時間の会議となったが、こうした総合教育会議の充実こそが、教育を推進する大きな力になっていると感じる。そのため、今後はぜひ開催回数を増やしていただきたい。

最後に、この場で議論された内容が単なる一言で終わるのではなく、今後どのように具体的な施策へ繋がっていくのか、そのプロセスが可視化される仕組みづくりを期待する。

3 閉会

【署名】

小林利明

緑川琴江